

● 社会主義諸国の現段階

# 中国の政治改革と鄧小平体制

## —— 建国四〇周年を迎えて

### 中嶋嶺雄



毛体制否定の民主化のプロセスで  
見られる自己矛盾

社会主義諸国の国内的な停滞、特に経済の停滞は、単に経済の問題としてのみならず、政治改革及び民主化を伴わなければ経済が活性化しないという大きなコンセンサスとして今、社会主義諸国全体に出ているような気がします。言うまでもなく社会主義の内部改革の潮流は早くも「ブラハの春」(一九六八年)に象徴されるチェコの動

き、さらには「連帯」に象徴される一九八〇年の新しいポーランドの胎動が先駆けとしてありました。しかしながら、いずれもこれらの社会主義内部の民主化及び政治改革は一時的な挫折をこうむっていると言わざるを得ないわけです。そうした中で登場したソ連のゴルバチョフ指導下のペレストロイカ体制は、今急速にソ連社会を変化させつつあります。

こういう世界的な潮流の中にあつて、中国の政治改革を一体どのような

コンテキストで受けとめたいのであろうか。

この点は中国の改革及び開放の政策の将来、そして中国現代化という一種の国家目標にとっても極めて重要な問題だと言わざるを得ないわけです。

ここで確認すべきことは、中国における政治改革の潮流は、やはり特殊中国的な性格を著しく帯びているという点であります。それはいわば毛沢東体制からの脱却の過程を毛沢東のカリスマ的な専制支配、それがもたらした特

中国の政治改革と鄧小平体制

に文革一〇年及び毛沢東の社会主義体制における約三〇年の治世が、いかに中国社会の停滞と社会的な亀裂をもたらしてしまっただかという状況への根本的な自己批判を、大きな前提にしてい

たと言わざるを得ないわけです。そうした中で七〇年代後半からは中国共産党内部で旧実権派勢力、すなわち劉少奇、鄧小平体制に連なる人たちが権力を確立していく過程であり、この過程は同時に毛沢東派と言われる華国鋒体制の凋落過程であったわけですが、早くもこの時期に鄧小平氏はいろいろの改革プランを提起しておりま

した。一九七五年のいわゆる総綱論として知られる鄧小平改革、さらに一九八〇年に提起された庚申改革と言われ

る試みなどもその一環であったと言えるでしょう。こうした政治改革、民主化への要求は毛沢東型の党装置を根本的に改革し、知識人、テクノクラートなどの新

しい社会的な受益者層の発想を基礎にしていたと言えるわけで、こうした政治改革の動きが鄧小平体制を支えてきたと言わざるを得ないわけです。

しかし、そこには大きな矛盾があつたと言えましょう。その矛盾の一つは、中国の場合どうしても政治改革が路線闘争の一環として位置づけられざるを得ないという問題であつて、改革派と保守派ないしは原則派という路線闘争が存在してきたことは否定できません。したがって鄧小平氏もみずからの権力を確立する過程では民主化を非常に強調したにもかかわらず、一たび権力が確立された過程では逆に民主化を抑える方向に転ずることが過去二回あつたわけです。その第一回は『四五論壇』『探索』のグループに象徴される、非毛沢東化を求める、鄧小平改革に勢いづけられた反体制知識人の動きでした。しかし、これはいわゆる「民主の壁」が大きな社会的反響を

もたらし、一九七八年秋をピークにして燃えさかりましたが、鄧小平は同年一二月の三中全会でみずからの権力を確立した後は、そうした反体制派の動きを封じ込めざるを得なくなつたというジレンマがあります。それは例えば、魏京生らの反体制派の先進的な知識人の要求が極めてラジカルであつたということもありましょう。

そうした中で党内の政治改革を見てもみすと、一九八二年の一二回党大会以来集団指導制を目指す中で、毛沢東型動員体制から党権力、党の統治機能の制度化という方向を目指し、同時に党主席に集中する権力の分散を図ろうとしたわけです。

このような状況は一たん挫折した民主化運動に再び刺激を与えたという結果が出てまいりました。象徴的なのは一九八六年末のいわゆる学生運動を中心としたさまざまな民主化要求であつたと思えます。この民主化要求は中国

の改革派の中心的な知識人であり当時中国科学技術大学副学長であった方励之氏、『人民日報』副編集長であった王若望氏、作家の劉賓雁氏らを中心としたいわば民主化要求、自由化要求であったわけですが、この民主化運動はまことにすさまじい勢いで拡大していったのであります。

この民主化要求の中で出てきたのが胡耀邦総書記の関与でありました。胡耀邦氏は鄧小平体制の中でどちらかという学生運動なり民主化運動に密着していたと言われるし、鄧小平批判を避けるために集中した胡耀邦への批判を回避するためにもこれらの運動に依拠したと言われるわけでありました。しかしながら、一方こうした状況の流動化に対する党内の原則派及び保守派の抵抗も極めて強かったわけでありました。このことは八七年一月の衝撃的な胡耀邦失墜というドラマになってあらわれました。この胡耀邦失墜に最終的

な役割を演じたのが鄧小平その人であって、いわば彼は鄧小平体制を擁護するために胡耀邦をスケープゴートにしたとも言えるわけであり、これらの路線闘争、党内闘争が中国の民主化に極めて深い関連を持っていたという意味で、他の諸国には例を見ない状況があらわれます。これはいわば毛沢東体制からの脱却のプロセスにおける、一つの自己矛盾と言わざるを得ないでしょう。

依然として脆弱な経済基盤と  
儒教的権威主義的専制体制

もう一つの中国的特徴を考えてみますと、これは中国の経済基盤が依然として極めて脆弱であり、一人当たりGNPが二五〇ドルという社会主義の後進国という状況の中で、鄧小平の改革と開放路線に対応した外からの「西側の風」が学生、知識人をとらえたのですが、そうした状況が中国の経済の現状とうまく結びつかない。つまり経済

的にはまだ非常におくれた状況であり、言ってみれば大衆的規模での貧困が存在しているながら、はたして民主化が可能かという問題があったような気がします。

中国以外の多くの途上国を見ていると、一人当たりGNPが約二〇〇〇ドル前後になると社会体制としても民主化が余儀なくされ、政治改革をせざるを得ない。いわば独裁体制あるいは権威主義体制から民主体制への移行が社会的、経済的、社会的成熟に不可避であるという状況は、今日の韓国及び台湾を見ても明らかだろうと思います。

中国の場合にも、さまざまな民主化のプログラムが存在し、あるいは党政分離の試みが現に行なわれ、国務院の機能の拡大、つまり党に対して政府の機能の相対的な強化が新しい中国共産党の方針及び新しい憲法によっても認められているにもかかわらず、やはり民主化に対する社会的成熟が非常に不

十分である。そうした中では経済が順調に推移している限りでは民主化要求がかなり受け入れられるのですが、一たび経済の混乱、そしてその混乱の責任に対する追及などが行なわれることになる、たちどころに肝心の民主化のほうをストップせざるを得ないという状況があるわけで、これは今日の鄧小平体制がその後、政治改革をあまり強調しなくなっている大きな原因だろうと思います。

第三点目の要因としては、中国の権力構造における特殊中国的な専制体制、カリスマ体制を指摘せざるを得ません。これはいわば儒教的権威主義体制ということもできるのかもしれないが、鄧小平ほどのしたたかな政治意識を持ち、しかも毛沢東の独裁の犠牲者であった指導者においてさえ、今日の中国を見れば明らかのように、鄧小平氏においてはいわばワンマン体制を敷いております。

民主化要求の中で出てきたいわばジェロントクラシー（老人支配体制）からの脱却という要求に対して、世代世代を進めつつあるとはいえ、鄧小平その人が八四歳の高齢であるにもかかわらず依然として実質的には最高の権力を保持していること自体、鄧小平自身における大きな矛盾だと言わざるを得ないのであります。

このような卑近な例の一つとして、一九八四年の建国三五周年記念を挙げることができます。このときに中国は国家行事として盛大な祝賀セレモニーを行ないました。日本からも三〇〇〇名の青年たちが訪中して話題を呼び、これが逆に胡耀邦個人のイニシアティブだということで、後に胡耀邦氏自身の責任が追及された出来事でもありましたし、胡耀邦氏と中曽根政権との過度の密着がこれまた個人的なレベルだということ、後に胡耀邦批判の材料にもなったというエピソードを残した

あの建国三五周年の記念式典を見てみるとはつきりすると思います。

建国三五周年の天安門前広場における式典は、中国共産党の行事ではなく、まさに国家の行事であります。しかもこのときには既に国家主席として李先念氏が就任をしていたのですが、彼はこの国家的行事において、国家主席であるにもかかわらずあいさつさえしなかった。すべて鄧小平氏が牛耳ったという近い過去が思い起こされます。

そして今日の中国の政治体制を見ても、鄧小平氏は党の総書記でもなく、また国務院の首相、すなわち総理でもなく、いわば党中央軍事委員会主席という軍関係の最高指導者にしかすぎない。にもかかわらず、恐らく八九年前半に予定される中首脳会談においても、あるいは多くの外国首脳の訪問においても、最後は鄧小平氏が内外情勢全般を統括するという実質的なワンマン体制が続いているのであって、

このような状況を考えると、いわば毛沢東型権威主義体制からの脱却が改革派指導者である鄧小平氏自身においても不十分であり、多くの矛盾をはらんでいるという問題を痛感せざるを得ないのであります。

以上のように、中国の民主化には三つの大きな特徴及び民主化を阻む要因が現実存在しているのであって、この点を今後の中国がどのように脱却していくかということが、大きな課題だと言わざるを得ません。

「四つの現代化」の達成困難から出てきた「初級段階論」

そこで次に、この三つの要因がどのように除去されるかを考えてみますと、まず経済問題を見てみると、今日の「四つの現代化」がはたして順調に推移するだろうかという問題があります。「四つの現代化」、つまり工業、農業、国防、科学技術の現代化という

まな資本主義的な残滓を公認せざるを得ないといういわば国家戦略であり、これは決して積極的なものではなく、非常に受動的かつ余儀なくされた選択だと言わざるを得ないし、いわば社会主義初級段階論という形で理論づけをしない限り、現状の中国の経済水準を説明できないというジレンマだろうと思います。

しかも一方では、これまでの中国は解放前と比べて生活がよくなったとか、あるいは革命後社会の建設が進展したことをある意味では誇示することができたにもかかわらず、そうした過去との垂直的な比較のみならず、周辺国の活力ある新興工業諸国、しかもそれらすべて中国の文化的影響を受けたといゆる儒教文化圏であって、近接する香港、そして中国がみずからの領土として主張している台湾、さらには韓国、シンガポール等々の著しい経済発展の影響が大陸にも及んでくる時代で

国家目標ですが、これをわかりやすく説明すると、一九八〇年を起点として所得の四倍増政策によって一人当たりGNPを今世紀末までには一〇〇〇にするのが当初の目標でありました。今日の中国は二けた台の経済成長を続けているにもかかわらず、一人当たりGNPないしは国民所得の伸びはゼロ成長という状況にあります。

これは一つには人口が一人っ子政策にもかかわらず依然として年々一五〇〇万人単位で増加しているという深刻な問題がある半面、分配所得と生産所得の不均衡、つまり貧富の差の拡大によって、平均的に中国の経済水準が民衆レベルではほとんど上昇していないという状況が存在しています。しかも最近では経済秩序の混乱、拜金主義の不正、賄賂の蔓延等々の矛盾や混乱の中で、西側世界に鼓吹された形での消費性向の著しい伸長、物不足等々が重なり合って著しいインフレ、これは平均

あります。そうした周辺の儒教経済圏諸国あるいは経済圏地域との格差がますます大きくなる中で、中国の低い経済水準を合理的に説明せざるを得ない一つの逃げ口上としての社会主義初級段階論だと言わざるを得ないのであります。また、この点でも中国経済の将来にはかなりの危険信号を感ずるのであります。

そうすると恐らく中国のGNPが二〇〇〇年のレベルに達するのは二世紀の中ごろではないか。そのレベルに立ったときに、経済の成熟が政治を変えていくという原理が本格的に有効性を帯びてこざるを得ないわけで、それまで待たざるを得ないという問題が存在しているように思います。

中国の指導者は鄧小平氏をはじめとして李鵬氏なども、中国の社会主義建設は五〇年代の前半までよかった、特に五七年の百家争鳴運動を反右派闘争に転換し、やがて五八年の人民公社大

的には二十数%と言われるが、品目によっては対前年比二〇〇%、三〇〇%という物価の上昇があり、こうした中で中国の一般大衆は改革と開放の恩恵をほとんど受けていない。一部の幹部と対外接触の掌にあるような受益者層及び万元戸に象徴される富農の存在が目立つのみである。多くの矛盾や混乱を来しているわけであります。

こうした中で中国の「四つの現代化」は、今世紀末までに当初の目標が達成できないことが明らかになりました。こうしたジレンマの中で出てきたのが「社会主義初級段階論」だと言わざるを得ません。

社会主義初級段階論は、八七年秋の一三回党大会でも追認された趙紫陽総書記の提案でありましたが、いわば長期にわたって、建国一〇〇年の二〇四九年に至るまで中国は社会主義の初級段階として極めて低い経済水準、そしてその中では市場原理の導入やさまざ

躍進政策、そして六〇年代半ばからの文化大革命に至る約三〇年間の中国の政治は中国の社会主義建設に根本的な打撃を与えた、という自己批判を最近提起しています。これは私自身が一九六四年の私の処女作『現代中国論』以来主張してきたところでありますが、まさに毛沢東型社会主義の三〇年間にいうものは単に中国の経済を停滞させ社会を分断したのみならず、多くのマインナス遺産を残してしまっただけで、このマインナス遺産からの脱却が今後数十年必要だと言わざるを得ない状況が存在しております。

その一方で中国社会の中の民衆レベルの意識の変化は急速で、「四つの現代化」についてもこれはいわば香港に隣接する深圳経済特別区の香港化であり、海南島の台湾化であり、広東省全体の深圳化であり、中国全体の広東省化であるという一種のブラックユーモアが語られているのですが、これは単

にブラックユーモアではなく、趙紫陽氏らの改革派が進めようとしている政策はこうした中国社会の停滞的な状況、経済的混乱とジレンマの中では不可避免的にそちらの方向に行かざるを得ないのではないかと読み取ることができるわけでありませう。

### 路線闘争から脱却できない中国にしのび寄る台湾の大きな影

そのように考えますと、こうした状況に対する批判が当然出てきます。今日の国務院総理である李鵬氏は姚依林政治局員らとともに原則派のリーダーと目されるわけで、鄧小平型の拡大均衡路線に対して縮小均衡型の社会主義の原理原則により忠実であろうとする党中央顧問委员会主任の陳雲氏の経済路線に、より忠実であろうとする人たちであります。

陳雲氏は老齢・病弱でありますけれども鄧小平氏と並び称せられる偉大な

ありながらこのところ目覚ましい政治改革を進めている台湾への注目と期待が急速に高まっております。

私もこの間、八八年夏の訪中のとき、さらには最近も何人かの中国社会科学院の指導的立場にある学者と意見を交換する機会がありました。そこでこの話題は、台湾が国際的孤立の中で蒋介石独裁体制から蔣経国権威主義体制へ、そして李登輝新総統時代の民主体制とどういって政治改革のテキストとどおりのような目覚ましい発展を遂げ、戒嚴令の撤廃や複数政党制の実質的容認、大陸との人的交流、文化的・学術的交流の拡大等、国民党の組織体系及び権力基盤を根本的に修正するかのよう大きな変化を遂げていることに対する注目だと言っています。

こうした台湾の政治改革は、言うまでもなく台湾経済の著しい成功と表裏一体化していることは否定できません。今や台湾は一人当たりG N P が五

指導者であり、中国の経済が鄧小平型路線でうまくいかなくなる時には必ず陳雲路線が照らし出されるという存在であって、当面この改革派と原則派の路線闘争も引き続き存在すると思えるを得ないのであります。そうなりますと、もう一つの中国の特徴である路線闘争からも、なかなか脱却できないという矛盾が生じるのではないかと。

最後の矛盾として、鄧小平氏のいわば権威主義体制、ワンマン体制ですが、恐らくこの点は鄧小平氏の肉体的な生命いかんにかかわっていると思えます。

しかし、考えてみると中国の政治改革の方向が一人の指導者の肉体的な条件に左右されること自体、中国の政治改革の持つ落とし穴が依然として大きくあいているということであって、私は鄧小平氏が今日のようなワンマン体制を続けていった場合には、鄧小平氏なき後も鄧小平批判の可能性も否定で

きない面があるように思います。

これは単に中国国内で毛沢東のような生前には圧倒的なカリスマ性と権力を持っていた指導者が、その死後次に批判される、あるいはソ連においてさえブレジネフ体制が今日批判されている現状を見れば見るほど、社会主義全体の民主化要求の中では避けられないことになりかねない宿命を持っているのではないかと見ております。

そこで、そうした民主化要求の中で最近の中国の知識人の間には「中国のサハロフ」と言われる方励之氏のように極めてラジカルな意見を保持し続ける人が存在し、そうした中国的体制は中国自身が解散しない限り変わらないという意見や、あるいは台湾の反体制作家柏楊氏のようにそれこそ中国人の持っている事大主義の体質だという意見も出ているのであります。こうした中国の特性への批判も含めて現状への不満が募る一方、同じ中国社会で

〇〇〇を超え、一人当たり外貨準備高は日本を追い越して世界一という状況を考えて、台湾が経済的成功をここに独裁体制から民主体制へ政治的改革を一步一歩進めてきている現実を無視するわけにはいかないものであります。こうした台湾の成功というものが中国に逆に影響を与えていくであろうというのが今後の方向ではないかと思えます。

### もうひとつのインパクト・ソ連と蛇行が予測される中国の政治改革

一方、もう一つのインパクトはソ連のペレストロイカであることは言うまでもありません。ペレストロイカについてはわが国にもさまざまな見方があり、日本政府・外務省やソ連研究者のかなりの部分はペレストロイカについて依然として懐疑的であります。そしてブレジネフ型の官僚支配体制からの脱却が今日のソ連の政治体質からすれば

ば不可能であり、ペレストロイカはみせかけにすぎないという意見がわが国にも横行しております。そして同時にグラスノスチ(情報公開)はいわばソ連の権力的が民衆に与えるアメであって、必ずムチが用意されているという意見も強いように思います。

しかしながら、私はゴルバチョフ体制の登場以来そのような意見とは異なつて、ソ連がこれまで維持してきた社会主義体制の硬直化が深刻であるがゆえに、それからの脱却以外にないという強烈な自覚を持った指導者が、ゴルバチョフ書記長ではなかったかと思っております。

こうしたゴルバチョフ書記長のリーダーシップのもとで、このところソ連はかなり大胆な政治改革を行なっていることは、八八年七月の全ソ党協議会及び八八年十一月のソ連最高幹部会議における憲法改正案の可決等によって明らかです。そこには、強力なりー

ダーシップのもとに政治改革を進め、上からのブレイクスルー(打開策)によってソ連社会の硬直性を打破して、ことう強い信念が見られます。

このことは外交的にはいわずに、ニューシンキングの外交として米ソ関係の打開、中ソ関係の改善、日本以外の西欧諸国との緊密な相互依存体制の確立、そして軍拡から軍縮への大胆な歩みとして世界の注目を浴びているところであって、これはソ連自身が経済を活性化せざるを得ない、そのためには軍縮が必要だということに帰着するわけだろうと思います。

私も八八年一月の日ソ円卓会議への参加を通じて確認したように、ペレストロイカはまず何より思想の開放であり、多様な意見の表出であり、上部構造における自由の拡大であって、そのことによって硬構造社会主義体制としてのソ連の社会・経済システムが一挙に柔軟化するとは思われません。

早い話が学者やインテリ、あるいは党幹部を含めて極めて自由に発言するようにになりましたが、しかしながらソ連で朝、私の好物であるヨーグルトを飲むとすると四〇分行列をしなければならぬ。ホテルにはたくさんカギ番の婦人が暇をもてあましているわけで、彼女を一人そこにつければ時間は半分で済むにもかかわらず、それができないというのが、恐るべき社会主義の惰性のシンボリックなあらわれであって、このようなことを考えると、ソ連社会全体の柔軟化、活力の増大という点に関しては長期の改革が要請されると思います。

しかしながら、今日のソ連はそうしたペレストロイカが単に政治・思想の問題のみならず、歴史のペレストロイカを含めて歴史を再評価し、根本的な体制の改革を試みているという点では、中国のように余儀なくされた受動的な政治改革、そして常に途中で挫折

するというプロセスとは違った可能性を秘めていると言えるでしょう。

これは同時に、ソ連が既に社会主義先進工業国として存在するという中国との根本的な社会的基盤の相違だろうと思います。

中国の場合にはソ連が硬構造社会主義であるのに対して柔構造社会主義であり、また中国は長い伝統社会の上に存在しているわけであって、社会システムそのものは地縁、血縁的な横社会的ネットワークの中に存在していますから、その点では表面的なフレキシビリティ、表面的な活力は常にソ連と比べものにならないスピードで動いています。そうであるだけにこの中国の伝統がもたらす呪縛からの脱却は、経済の停滞とともにより困難があらうと思います。

したがって、より根本的な改革はむしろ中国よりソ連のほうが先行していると言わざるを得ないわけです。

成が次のステップとして出てくるように思われます。そうした状況の中で、ソ連の中国への影響がかなり大きくなっていくのではないかと思います。

ということになる、要は中国が今の経済をいかに脱却し上昇気流に乗せていくかという問題であり、さらに伝統的な中国社会の体質からいかに脱却するかということですが、この二つともそう簡単ではないとすると、当面中国の政治改革は紆余曲折を経ながら、後戻りはしないまでも、右へ左へと蛇行を繰り返していかざるを得ない

いのではないかと思います。

そのような中国の現状を冷静に見きわめつつ、わが国としては表面的な日中友好ではなくて、より本格的な中国との対話が必要であり、そのためには外交的に常に中国の主張にひざまずいて、位負け外交を繰り返すというパターンから脱却し、積極的に中国の経済改革、政治改革に対しても物申すという日中関係が必要になるのではないかと思います。

(一九八八年二月八日)

(なかじま・みねを 東京外国語大学教授)

中国の場合には余儀なくされた政治改革への歩みであるのに対して、ソ連の場合は積極的に状況を打開しようという政治改革という違いがあるわけで、これらの相違は今後の中国にとって大きな教訓になるのではないか。

社会主義工業先進国・ソ連と社会主義発展途上国・中国との間には極めて多くの相互補完、相互依存の関係があるわけで、中ソ接近は単に二国間関係のみならず社会主義諸国の延命あるいは改革のためにも、みずからの再編成と中ソ間の「緩やかな同盟」関係の形

# 月刊 現代の理論

'89年1月号 NO.257  
A5判・100頁・480円

- 特集 丸山眞男を読む——その4
- ドイツ語版序文『日本の思想』…… W.シャモニ、W.ザイフェルト
  - 福沢、丸山と中国の「現代化」…… 区 建英
  - 三元里の対話…… 原島 春雄
  - 『丸山眞男著作ノート』を編集して…… 川口 重雄
  - 『「文明論之概略」を読む』を読んで…… 片岡 勝
  - 変革の主体としての社会…… 井汲 卓一
  - 生活のなかの文化摩擦…… 柴田 翔

現代の理論社  
千代田区平河町1-8-2  
半蔵門パレス503  
(261) 2268・7518